

東京学芸大学連続講演会 第11回
「冒険遊び場への誘い」
～子どもの遊びとプレイリーダー～

講演「子どもの遊び場を支えるプレイリーダー論①」

塚本純久氏

武蔵野美術大学 非常勤講師



デンマークへの留学

私が留学した所は、フローベルセミナリエットです。日本ではフレールベルと言います。キンダーガーデンという幼児教育を始めたひとの名前を取って自由教育と言いますが、フリーエドュケーションをしている基本的な姿勢を持っている学校です。幼児教育から始まりましたが百年以上の歴史がある学校で、幼稚園教育では百周年をすでに90年代に迎えている歴史のある学校です。

最初は1年の留学でしたが、その学校が3年制の学校だったので、1年ぐらいつと会話にも慣れてきて、デンマーク語もできるようになってきました。私も、もう少し続けたいという希望があって、それがいろんな援助で受け入れられるようになり3年間いる事が出来ました。1977年～1980年までいました。えらい昔の事のようにですが、デンマークの教育といのは今も基本的には変わっていません。今もお付き合いしている先生方がいらっしゃいますし、レクチャーも受けましたが基本的には自由教育です。

もう一つ大事な点は子どものこと、あるいは子どもの環境のことを勉強しに行っているのですが、デンマークでも父兄のミーティングなり先生方のミーティングなり現場の幼稚園とかでは、すごくミーティングがあります。ミーティングで子どもの問題を話すときもありますが、もう一つ大人の問題を話すときもあるということが見えてきました。

その時、自分は30歳ぐらいでしたがどのように取り組んでいくのかわからなかったのです。難しいケースの場合はどういうふうにスペシャリストのもとに行くとか、担当が変わるとかいうふうに社会保障の国なのでいろいろな対応があります。しかし、私自身どうやって大人の問題に取り組んでいくのか、もちろん自分の

ことなのですがわからないところもあったし、迷いもありました。

そんな時、スイスのチューリッヒというところに行ったときに、ユング心理学の研究所に行きました。イメージや深層心理、サイコセラピーなど医学的なことも含めてどう対応するかという研究所です。

私が後で紹介する話の中でも出てきますが、冒険遊び場と箱庭療法、サンドプレイと言いますがそれを比較研究したことがあります。最初、あなたは何をしに来たのかと言われ、箱庭研究をやったらどうかとすすめられました。デンマークでは遊びのことをやっていたので。向こうでは冒険遊び場のことは知らないけども、子どもなり大人なりがイメージを通してどういう風に元気になっていくかということの研究することをアドバイスしてくれました。

その後、私が美術大学だったので絵画療法、絵を描いていながら心の問題、個人の問題を解決し、取り組んでいくという方法を中心に学んでいきました。最後は、癌の末期症状の患者さんとその家族の人たちの絵画療法のレポートをまとめて論文にしました。

武蔵野美術大学院では、これからお話しますが論文を書きました。冒険遊び場と箱庭療法を比較し、遊びという事がどういうことか、ファンタジーというものがどういうふうになら心の中で作用し、遊びの中でも作用して健全という言い方がいいと思いますが、日常生活や社会の中あるいは周りの人たちとどう融合していくかということをやりました。

今日は遊び場のことについてお話しますが、いくつかキーワードがあります。ここに「…ing」と書いてあります。特に私が最近思うのが現在進行形であるかどうかです。

それは、寝ている中でもいいです。夜寝ていても脳なり意識は動いていますから、何かをしていて動いていけばいいです。止まっていて、止まっている言葉や止まっている考え方がそこで立ち止まったり固まってしまうたりしているのではなくて、動いている事が大事だということがキーワードです。

デンマークでレゴというおもちゃがありますが、レゴってどういう意味か皆さんご存知ですか。デンマークでは遊びのことを「ライ」=legと言います。Leg good (ライグッド) = play goodが短くなってレゴと言います。だから、上手に、十分遊んでくださいということがレゴの言葉の意味です。

デンマークでは、子どもや大人もそうですが、非常に遊びということを中心に考えているところなんです。何

をやるときも子どものときはまず遊びを前面に出して、そこを活かしていくとその子の持っている能力が自然と活きて伸びていくだろうということです。ですから、私も皆さんにお聞きます。今日ここにいらっしゃった皆さんが普段何をして遊んでいますか。「遊びはことばの一つです。」

イタリアのレジジョチョというところの教育がそうなのですが、子どもは百の言葉を話せる可能性を持って生まれてきます。私も含めて君たちがオギャーと生まれてきたときは、いろいろな可能性を持って生まれてきているわけです。使わないと今の能力で止まっていますが、ある意味上手く使えばいろんな国の言葉なり表現ができるかもしれません。そういう意味で百=たくさんという意味で使いました。言葉というのはそれぐらいいっぱいあって、可能性があるのです。

デンマークでの内容

これからスライドをお見せしながら、デンマークの特に最初の遊びのことをお話したいと思います。

デンマークの冒険遊び場というのは、第2次世界大戦がありました但实际上に開かれたのは1943年で戦中なのです。戦中というのは、デンマークはナチスの軍隊に占領されていて、国としては非常に厳しい状態でした。一方で、地下活動といましてレジスタンスが活動している場であって、物資が少なかったりある意味で非常に苦しい状況でした。

デンマークという国のもう一つの特徴、エピソードがあるのですが、当時ユダヤ人は迫害されていました。その時、デンマークでもそういう状況があったのですが、今の女王様ではなく、そのお父様が国王で、国王は戦中でも馬に乗って時々町を散歩していました。その時、ユダヤ人は黄色い星の布を胸に付けさせられていました。その話を聞いた国王が、自分が街頭をそのマークを付けて散歩したというくらい、人権だとか博愛だとか人道主義といいますが、みんな平等であるということを非常に大切にしてきた国の一つです。

冒険遊び場は、ここに出ている写真1943年～1968年までのものです。最初の名前は「がらくた遊び場」という名前がついています。物が無い時代なので、廃材だとか壊れた自動車だとか船だとか、色んなものをかき集めてきて利用したりします。この最初の冒険遊び場が生まれるまでの背景をちょっとお話しします。

ソーレンセンという造園家がありました。ソーレンセンという方は、戦前からずっと活躍した方です。あるときロンドンの公園を歩いていたら大風のあとで木が倒

れ、枝が倒れていて、そこで子どもが遊んでいたわけです。その様子を見てみると、子どもたちが倒れている木のところに行って、自分たちで落ちている木と木を組み合わせてシーソーをして遊んでいました。

それをみたソーレンセンは、これは街の中の子どもにこういう用意をしてあげたら、彼らは自分の自発的なファンタジーでイメージーションな遊びを自ら作っていくかもしれない。それに気がつきました。それまで自分も公園とか造園とかの仕事をしてきたのですが、そこで気が付かされました。それが、1943年にいたる12年前の最初のアイデアでした。

なぜ12年かかったかということには色々な経緯があるのですが、ソーレンセンを含めてそれからいろいろな教育者も含めて、団地と団地の間に空いている土地があり、そこで冒険遊び場を始めようという動きが起こって始まりました。

保護され安心して遊べる（空間）場をつくる時：一つ大事な点があって、大きさは65m×82mというのが最初の空き地の大きさです。最初その土地をどうしたかということ、2mぐらい掘ったのです。そして、掘った土はどうしたかということ、周りを囲みました。土手みたいにして、そこに木を植えていきました。数年経つと茂ってきます。

要するに子どもが色々なことをすると、騒音の問題や散らかす問題、暴れまわったりする問題などいろいろあり、住民で静かに暮らしたい方をとる人にとっては厄介な代物になってしまいます。だけど、それを上手く囲うというのも一つの目的ですが、なかで遊ぶ子どもたちの側に立つと、僕たちの世界や親の世界でもない、近所のうるさい人たちの世界からシャットアウトされています。

これはすごく大事な空間で、たとえ話をしますと鳥の観察（鶏でも文鳥でもいいのですが）をした人ならわかると思いますが、卵があります。卵からどうやってひな鳥が生まれてくるか想像してみてください。親が作った巣の中でしばらく孵化しなくてははいけません。

今は卵の話をしていますが、卵と子どもの遊びやファンタジーは同じものだと思います。ファンタジーもいきなり出さないといつてポンッと出てくるものもありますが、しばらく暖めているとある時期が来て、中からひよこがつついて自分から生まれてくるわけです。ある研究によると、母鳥と中のひよこが同時につつきだすこともあるそうです。その瞬間というのがだいたい鶏では何日、鶴では何日、ダチョウでは何日ときまっているわけですね。

ですから、それぞれの孵化する時期というものもあるし、ファンタジーでもあると思うのですが、デンマークでもそういう作業をしてみた結果、土手を作って囲うという事がすごく大事なことでした。この学校でも考えてみてください。いま、私たちはこの教室で囲われているわけです。それから、周りの緑でも囲われています。(会場、拍手)

講演「子どもの遊び場を支えるプレイリーダー論②」

内藤裕子氏

まちとこどもの環境研究所代表、
NPO法人子どもと文化協議会・
プラッツ理事



今日は皆さんからご希望のあった子どもの遊びのプログラムの紹介をスライドでお見せします。最初にお見せするのは私が見学に行きましたミュンヘンの子どもの遊びの活動です。また、私が地元立川でやっていますプラッツ(NPO法人)の活動と、私の会社のまちとこどもの環境研究所が請け負っている活動も見ていただいて、みなさんに色々お伝えしたいと思います。

(以下、スライドを見せながら)

◆ミュンヘンの地域への遊びの出前「プレイバス」◆

まず最初はミュンヘンの遊びの活動からご紹介したいと思います。これはミュンヘンだけではないのですが、ヨーロッパにはプレイバスという活動がありまして、遊びの出前をするんですね。ある会場に来てくださいというとかかなり無理のある人がいるんですね。遠くへ行けなかったり、交通費が難しかったり、小さい子がいて難しかったりするので、ミュンヘンでは子どものいる地域に直接でかける遊びの出前を10年以上前から始めています。

●インディアン村の実践

インディアン村というのは子ども達が公園の中でインディアン体験を3週間実践していました。私が行った時はちょうどその3週間の真ん中あたりなんですけれども、このポスターが(ポスターの写真を見せて)街の中に貼られていまして、広い公園などを借りて遊びが展開されます。遊びの出前はバスに遊び道具を積んで

行くんですね。色々な公園や広場に出かけます。このインディアン村というのは3週間やっています、最初の1、2日は子どもたちが博物館に行ってインディアンがどういう生活をしているかキュレーターからお聞きし、話を聞いてから、今度はそれを自分たちが体験してみようということで、次の日から3週間インディアン遊びの実践が始まります。毎日色々なプログラムがありまして、インディアンの衣装を作ってみたり、機織をやってみたり、色々な生活用具を作っているのを体験してみたり、皮に絵を描くアートを体験してみたり、食べ物を作ってみたり。

ミュンヘンは私が行った当時は小学校の授業が午前中しかなくて午後は地域の時間になっていまして、その地域の時間の中で色々な人やグループが遊びを提供していました。で、これはその中のプログラムのひとつです。年齢も色々な子がいて実際大人がしかけたプログラムの中に入らない子もいるんですね。そういう子は好きなことができるのですが、ちょっと歳のいった子は、今日は公園の中で何が行われているのかを書いて、新聞を作って配っていたりとか、自分で遊びのプログラムを見つけることもできるようになっています。ここは3週間で大規模だったものですから、市民会議場や、銀行を作りまして、実際その時代の街の機能を体験できるようになっています。市民ホールではみんなが街のことについて話し合うのに利用したり、銀行だとお金を作ったりとか流通させたりなどいろんな体験をしています。ここはシアターもありまして、その時代のあるお話を持ってきて大人と一緒に子どもたちが練習して劇を演じます。そしてまたそこに観に来る子もいるという、こういった形で3週間色々な方面からインディアンの生活を知りながら体験して遊んでいます。これがひとつの遊びの出前のプレイバスの事業です。



インディアン村全景・ミュンヘンの公園

●ネットワークして活動する

遊びの出前を行うプレイバスはインディアン村だけ